

平成26年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ

今年の山梨インターハイでは、東京都の男子は1種目に優勝し、入賞は10種目としました。また、ユースオリンピックでは、10000m競歩で小野川 稔（東京実業2）選手が金メダル、100mでは大嶋 健太（東京2）選手が銀メダルを獲得するなどその活躍は目覚ましい状況です。また、東京都の競技レベルは全国屈指の高さを誇ります。来年度の和歌山インターハイへ向けて1・2年生の躍進を期待します。

10月25・26日に茨城県で行われる関東新人大会出場を目指す本大会の展望をお楽しみください。

男子

・短距離

100mでは、インターハイチャンピオンの大嶋 健太（東京2）の独壇場であろう。10秒37の東京都高校記録を樹立した大嶋の走りに注目したい。しかし、同じくインターハイで1年生ながら200mで第2位としたサニブラウン・Aハキーム（城西大城西1）と今大会の予選から激突する。二人とも長崎国体を控えておりどこまで「本気」で走るかわからないが、かなりの好記録を期待したい。ユース世代の「日本一」をかけたレースになる可能性もある。二人のほかには、大野 裕貴（立教池袋2）、日高 クリスチャン（東京2）をはじめ、支部予選ではなんと14名もの10秒台がマークされている。決勝進出をかけた争いも見ものである。

200mも100m同様だが、21秒台でなければ決勝進出がむづかしいかもしれない。

400mでは、山梨インターハイ出場の尾崎 正大（桐朋2）を中心としたレース展開となるだろう。北山 亮介（東京2）、椿 純平（城西大城西2）らが尾崎と優勝を争うと思われるが、48秒台前半の記録を持っているだけに47秒台への期待をしたい。

・中長距離

ここ数年、レベルが高く1分55秒台での決勝進出が続いていた800mだが、今年も有望選手がいる。選抜大会で1分53秒台をマークした渡部 侑輝（城西大城西1）である。中学時代から全国大会での実績も高く、潜在能力も高いことから来年への期待も膨らむ。渡部と競り合うとすれば栗田 寛樹（巣鴨2）だろう。予選のタイムレースから積極的なレースをして好タイムを期待したい。

1500mと5000mでは、有力選手が多かった3年生が抜けたことと、今大会の期間中に福島県白河市での駅伝大会に出場する学校も多いことから今大会に出場しない選手も多いようだ。こうなると、レベルは下がるが「混戦必至」な2種目となるだろう。そのような状況で、支部予選を勝ち抜きこの大会で優勝を狙えそうなのは、1500mでは本橋 佳樹（立教池袋2）と800m専門の渡部・栗田あたりと思われる。5000mでは、東京実業の藤村 遼河（1）、武田 悠太郎（1）、中野 恵太（2）と久我山の岸 俊樹（2）、石川 翔輝（2）らがレースの主導権を取りそうだ。出場者全員に、夏の鍛錬の成果を発揮し、駅伝シーズンへと弾みのつく好走ができることを全選手に期待したい。

3000mSCは、1500mで有力な本橋がこの種目でも優勝を争いそうだ。9分20秒台での優勝が予想されるが、走力次第では上位に食い込むことが可能になるので最後まで粘り強く走り切りたいところだ。

・ハードル

110mHは、山梨インターハイで準決勝まで進出した平松 パプデンバ（都芦花2）が出場唯一14秒台の記録を持ち、かつ実績も最上位であろう。自己記録は14秒52だが風力などの条件次第では14秒台前半が出てもおかしくない。平松に続くのは橋岡 優輝（八王子1）、成澤 優雅（東京1）の1年生が急成長し関東新人出場を狙っている。

400mHは、53秒台のベストを持ち400mでも優勝候補の北山 亮介（東京2）が52秒台を目指したレースを展開しそうだ。同じ1支部の山田 嘉将（日工大駒場2）、石山 翔英（東京1）が54秒台前半の記録を持ち北山に続き関東新人を目指しそうだ。

・競歩

5000m競歩では、ユースオリンピックで優勝した小野川 稔（東京実業2）が出場しないのは残念であるが、試合が続く疲労があることは否めない。将来のことを考えると致し方ない。そうすると優勝争いは混沌となるだろう。石坂 夢真（都東大和2）がただ一人24分台の記録を持ち、頭一つリードしている。これを東京実業の亀井 貴一（2）、秋山 匠太（1）の二人が接戦に持ち込む作戦となるだろう。

・跳躍

走高跳では、今大会に出場する選手で自己記録が2mを越えている者が5名もいる。ここ最近にはないハイレベルだ。今年インターハイに出場した石川 遼（桐朋2）、鈴木 海平（堀越2）。最近好調な伊関 礼（国学院2）、遠藤 航（日大豊山2）、実績のある平塚 玄空（岩倉2）と誰が優勝してもおかしくない。このレベルの中から2m10に近づくジャンプをする選手が出ることを期待したい。

棒高跳は、熊坂 優（東京1）が1年生ながら4m40を跳んでおり、今大会では更なる記録更新を期待したい。跳躍技術には良いものを感じるが助走スピードに課題がある。その課題がクリアできれば4m50以上が可能となるだろう。入賞ラインは4m00か？

走幅跳は、山梨インターハイに出場した中村 健士（都調布北2）が支部予選で7m11と復調の兆しを見せてきた。インターハイでは6m台に終わり本来の跳躍を見失っていたようだが、今大会での優勝を目標に本来の跳躍を取り戻してほしい。7mを越えてきそうなのは、三段跳びと兼ねる平川 雄大（都片倉2）、舘 一樹（東京2）、木之内 喜史（東京2）と1年生の橋岡 優輝（八王子1）、早坂 明（東京1）あたりと思われる。

三段跳びでは、平川・舘・木之内が自己記録で14mを越えており上位を占めそうだ。特に平川はすでに支部の夏季大会で14m47をマークしており優勝に最も近いと言える。

・投擲

砲丸投・円盤投とも東京成徳2年の石塚 恒祐が夏場の練習で急成長し優勝候補と言えるが、関東大会で活躍した東京高校の栗本 恭宏（2）が砲丸で、福留 大成（2）が円盤で対抗しそうだ。記録的には両種目とも東京高校の二人が上回っているが、8月後半の私学大会では両種目とも石塚が勝っている。お互いの競り合いから砲丸では15mを、円盤では45mを越えることを期待したい。

ハンマー投げでは、すでに大会記録を上回る記録を持つ岩崎 瑞生（保善2）の優勝は間違いないだろう。春の総体でも上位入賞を確実視されていたが、ファールを重ねて入賞を逃した。しかし、この夏の練習から課題を克服し記録を伸ばしている。岩崎に続くのは同じ保善の人見 哲史（2）、東京高校の五嶋 耀介（2）、福留 大成（2）が関東新人出場を目指す。

やり投げは、支部予選で50mを越えているのは都片倉の佐藤 悠樹（2）、助川 直輝（2）の二人であるが、都総体2位で57m台の記録をもつ宗田 龍生（都芦花2）が一枚上手だろう。肘などに故障がない限り宗田の優位は揺るがないと思われる。

・リレー

両リレーとも、八王子・東京・城西大城西の3校が競り合うことだろう。3校とも今年の山梨インターハイを経験した1・2年生がいることから全国大会並みの記録が期待できる。特に4×100mRでは東京は大嶋を、城西大城西はハキムを投入することによって大いに状況が変わる。共に来年の全国制覇を狙うチームだけに「チーム力」で差ができるだろう。4×400mRでは3校が最後までつれあっていくだろう。走順によって勝敗が決まると思われる。東京都のリレーは今年のインターハイで活躍した。それも都内でのライバル意識がそれを育てたと思われる。出場全てのチームにチャンスはある。

・総合

トラック・フィールドともにバランスの取れた選手配置ができている東京高校が連覇を伸ばしそうだ。これに、城西大城西、立教池袋、八王子が上位に顔を出しそうだ。

平成24年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ

今年のインターハイで、東京都の女子は2種目に優勝し8種目に入賞した。インターハイの都道府県対抗では第2位にまで「大躍進」した。来年は更に上を目指すためにも今大会に期待したい。

女子

・短距離

100mでは、男子同様インターハイチャンピオンが出場する。エドバー イヨバ（東京2）の優勝は間違いないだろうが、インターハイ以降も好調を維持しているので大会記録更新を期待したい。上位を狙うのは広沢 真愛（八王子2）、小久保 夏花（かえつ有明2）が候補だろうが、斉田 果歩・福田 真衣の東京高校1年生コンビとモカダミ サラ（藤村女1）も次代を担うスプリンターとなることは間違いない。

200mも100m同様だが、上村 希実（東京2）、深澤 みなみ（國學院2）のロングスプリンに長けた二人にもチャンスはありそうだ。更に白梅学園の伴 明日香（1）、渡邊 真央（2）、佐藤 千夏（1）も決勝へ駒を進めることだろう。

400mは、支部予選で56秒台をマークした深澤 みなみが頭一つ抜け出している。白梅学園・東京高校の選手たちがこれを追いかける展開となるだろう。優勝記録を是非とも55秒台へまで引き上げてもらいたい。

中長距離

800mでは、五十嵐 恋（日本橋女子2）と木村 綾愛（早稲田実業2）、草場 史佳（東京2）の三つ巴となりそうだ。実力的には五十嵐がスピード・持久力的にも一枚上手であるが、レース展開次第では草場・木村にも十分チャンスはある。優勝記録を2分10秒台にまでなりうる可能性もある。

1500mでも木村が中心となるだろう。これに東京高校の宮田 彩子・金杉 侑香・山本 美帆の2年生トリオと城西大城西の秋山 唯（1）が競り合っていくことだろう。

3000mでは全国駅伝を目指す順天高校が白河駅伝出場のため今大会には出てこない。そうすると、八王子高校と東京高校の争いとなりそうだ。優勝争いは今泉 野乃香（八王子2）と宮田 彩子（東京2）の二人に絞られるが、入賞争いは混沌としそうだが9分台になることを期待したい。

・ハードル

100mHでは、鳴川 亜美（2）と八尋 はるか（1）の白梅学園の二人が有力であるが、インターハイに出場している鳴川の優位は揺るがないだろう。しかし、都総体はケガのため入賞を逃し、シーズンの前半を苦しんだ澤田 イレーネ・オギモンギ（都文京2）が帰ってきてそうだ。昨年1年生ながら13秒台をマークした走りには及ばないと思われるが、どこまで回復したのかを確かめたい。是非来年への足掛かりをつかんでもらいたい。

400mHでは、田島 梨紗乃（東京2）が唯一1分03秒台の記録をマークしており優勝候補筆頭である。ロングスプリントもハードリングも安定していることから大会記録を目指してもらいたい。

・競歩

今大会12名の出場と昨年の17名から出場者が減少した。その中で、萩原 采以子（都富士2）が全国大会に近づくためにも24分台を目指した歩きをしてもらいたい。これに、都総体3位の遠藤 朝美（日大豊山女2）が追う展開となりそうだ。

・跳躍

走高跳では、山梨インターハイに出場した伊徳 有加（都芦花2）と七種競技で活躍している高橋 このか（白梅学園2）が1m65以上の記録を持っており優勝候補だ。特に高橋は安定して1m65以上をマークしていることから優位とみられる。高橋 花織（専大附1）、栗原 理沙（都東大和1）、大橋 夏海（都駒場1）の1年生がどれだけ食い下がるかが見どころだろう。

走幅跳では、走高跳同様七種競技の高橋 このかが5 m 8 0を越える自己記録を持ち、安定して5 m 6 0を跳ぶことから断然優位である。高橋に対抗できるのは、1年生ながらインターハイに出場したアコウア 奈菜（都城東1）をはじめ、高畠 実咲（日工大駒場1）、和喜田 美咲（都つばさ総合1）の1年生パワーも実力があるので優勝のチャンスもあるだろう。

三段跳は今年28名のエントリーと毎年増加傾向である。今年はすでに11 mを越えている選手も複数おり状況といえる。その中で、1年生ながら11 m 6 4の自己ベストを持つ小川 瑞穂（都城東1）が優れた跳躍力と技術を擁して群を抜いている。コンディション次第では12 mを超える可能性も秘めている。石田 詩織（都青梅総合2）、寺尾 千慧（都文京2）も11 mを越えているので上位をうかがうだろう。11 mのラインが入賞を分けそう。

・投擲

砲丸投では、インターハイに出場し都総体でも優勝した坂本 早映（戸板女子2）が断然優勝候補である。しかし、13 mを越えていた自己記録だが、ここ最近では12 m台に留まっている。今大会をきっかけに14 mへの足掛かりを作ってもらいたいところだ。清水 捺帆（都田無2）、尾山 穂乃香（八王子実践2）、草野 夏咲（東京1）らに12 mへのチャンスがある。全国出場への目標となる12 mを越えてもらいたい。

円盤投では、インターハイに出場した藤田 幸楓（戸板女子2）が38 mの自己記録を持ち優位だが、支部予選では怪我でもしたのか31 m台に留まっている。藤田の優位は揺るがないと思うが、白石 颯希（東京2）が35 mまで記録を伸ばしていることから二人の争いとみられる。30 mが入賞ラインか？

やり投げは、都大会優勝の小林 比奈乃（都芦花2）が自己記録を45 m台にまで伸ばし優位である。大会記録更新を目指してもらいたい。また、1年生ながら40 mまであと一歩のところまできた三橋 笑萌（日体江原1）も勢いのある投擲をすることが出来はじめたことから期待したい。「投げる」感覚に優れているだけに小林と対等に戦うことができそう。35 mを越えると入賞が見えてきそう。

・リレー

女子の両リレーは、東京高校・白梅学園・八王子の激突と予想していたが、4×100 mリレーでは東京と八王子がバトンをミスして今大会の出場を逃している。そうすると白梅学園の優位となりそう。それに、インターハイに出場した都つばさ総合が48秒台をめざしそう。

4×400 mリレーでは、この3校の争いが熾烈を極めそう。全国レベルのデットヒートが展開されるだろうが層の厚い白梅に有利かと思われる。

・総合

各種目に有力選手が多い東京高校が優位かと思うが、七種競技の高橋 このかなど優勝候補の多い白梅学園の高得点も予想される。2校の争いはしばらく続きそう。